

お び の つ ぽ ら
大日野原遺跡

— 2012 年度発掘調査概報 —



2013 年 3 月 31 日
小林謙一

大日野原遺跡（相模原市 No.465）2012 年度発掘調査実施概要

1. 遺跡の名称 大日野原遺跡（県遺跡番号：相模原市 No.465） 相模原市緑区澤井ケッサイコ 724
2. 発掘調査実施組織 中央大学文学部（文学部長 河西良治、調査担当者 日本史学専攻小林謙一）
3. 発掘調査の概要 2012 年度は、2012 年 7 月 30 日から 8 月 8 日において、昨年度まで調査した第 3 次調査地点から南東に 50m ほど離れた地点を第 4 次調査点としての発掘調査をおこなった。74㎡の面積を調査し、古代の住居 1 基、円形土坑数基、縄紋時代後期の埋甕 1 基を確認した。古代の須恵器・土師器、縄紋時代中期勝坂式・後期堀之内式土器および石器が天箱 3 箱分出土した。
4. 発掘調査の体制 中央大学文学部日本史学専攻准教授 小林謙一 相模原市立博物館学芸員 正 洋樹 中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士前期課程 矢嶋良多・小澤政彦 中央大学文学部・考古学研究会、首都大学東京・國學院大学・立正大学学生 44 名、 相模原市立博物館ボランティア 8 名
5. 出土品等整理計画の概要 調査終了後に中央大学において実施中である。
6. 報告書刊行予定時期・出土品の取り扱い 引き続き調査が継続されるため、報告書は成果がまとまり次第刊行予定である。出土物は、整理作業中は中央大学で保管し、整理作業終了後は相模原市に移管する。
7. 発掘調査成果概要 遺構確認（縄紋埋甕 1 基、古代住居跡 1 基、円形土坑・ピット多数） 遺物（縄紋土器（中期勝坂式・後期堀之内式）、石器、古代土器）
8. その他・特記事項 平成 24 年度科学研究費補助金（基盤 C）「炭素 14 年代による縄紋集落の研究」（代表小林謙一、課題番号 22520774、2010～2012 年度）による学術調査である。 相模原市立博物館（考古部会・大日野原遺跡の研究）の調査協力を得ている。

大日野原遺跡（相模原市 No.465）の発掘調査の経緯と成果

（１）調査の目的

日本考古学では、炭素 14 年代測定の結果を年代的位置づけに取り入れることについて、いまだ十分な評価がなされないような状態である。世界史的な視野の中に日本先史時代を位置づけるためには、縄紋時代の炭素 14 年代測定研究を進めることは、緊急の課題である。

縄紋時代の集落研究は、土器編年研究と並び、日本先史考古学の大きな柱となってきたが、その内容は決して十分な成果とは言えない。高度成長期における大規模開発に伴う広域調査により、集落調査例は膨大なものとなったが、かえってその実体については不明確となり、特に最も遺跡数が多く集落も多く発見されている東日本縄紋時代中期についてみると、同時存在住居の把握や集落の定住性について、議論が続いている。同一の集落例を指して一時期に 100 軒の集落が長期に定住と考える研究者と、1 時期には 1 軒しかなく短い期間で移動とする研究者が、実証的な研究に立ち返ることなく、仮定に基づいた縄紋社会像を組み立てようとしている。膨大なデータとなった集落調査例を集成すると同時に、集落の内容をどのように時期区分するかを検討しなくてはならない。そのために、科学研究費補助金によって、縄紋遺構・集落の年代研究を行うこととし、縄紋中期集落の良好な遺存が期待できる相模原市大日野原遺跡の住居の調査を行い、竪穴住居ライフサイクルを明らかにしつつ、年代測定用試料を採取し分析することとした。相模原市教育委員会の協力により、大日野原遺跡を調査の対象として選定し、地権者及び地元住民、関係機関の協力を得て継続的な調査をおこなうこととした。大日野原遺跡は過去に 2 回小規模な調査がおこなわれ、平安時代及び縄紋時代の集落が確認されているが、農地として利用されており、殆ど全面的に集落が残されていることが予想できる遺跡である。2008 年度～2011 年度は A～D 区を 100m²調査し、竪穴住居跡 7 基以上を確認し、住居跡 4 基について掘り下げた上で埋め戻して、2008～2011 年度調査分を第三次調査報告として報告書を刊行し、第 3 次調査地点の調査としてはいったん終了することとした（中央大学文学部考古学研究室・相模原市教育委員会『中央大学文学部考古学研究室調査報告書 2 大日野原遺跡―第 3 次発掘調査―』2013 年 3 月）。引き続き他の地点を調査して集落全体の形状を明らかにしていくことを計画し、2012 年度は、2008～2011 年度調査区から南東に 50m 離れた斜面落ち際の地点に第 4 次調査区を設定し、集落の広がりを確認することを大きな目的として調査した。

（２）調査経緯

科学研究費補助金基盤 C「炭素 14 年代を利用した縄紋時代の住居期間の研究」（2007～2009 年度 課題番号 19520662）の考古学的調査の一端として、相模原市大日野原遺跡の発掘調査を 2008 年度よりおこなっている。2008 年 7 月に相模原市教育委員会と中央大学文学部との間で「大日野原遺跡の共同調査に関する協定書」を取り交わし、協力して調査をおこなうこととした。具体的な調査地点は、以前に旧藤野町が 1987 年に調査を行い、古代の住居跡を調査し、縄紋時代の住居が確認されている地点（藤野町 1995）の近隣部を対象とすることとし、地主の遠藤厚子氏の発掘調査承諾書を得た。また、周辺住民・農地所有者、相模原市役所藤野支所の協力を得た。2008 年度は、遺存状態のよい縄紋中期竪穴住居の広がりの確認、2009 年度～2011 年度は SI-01・

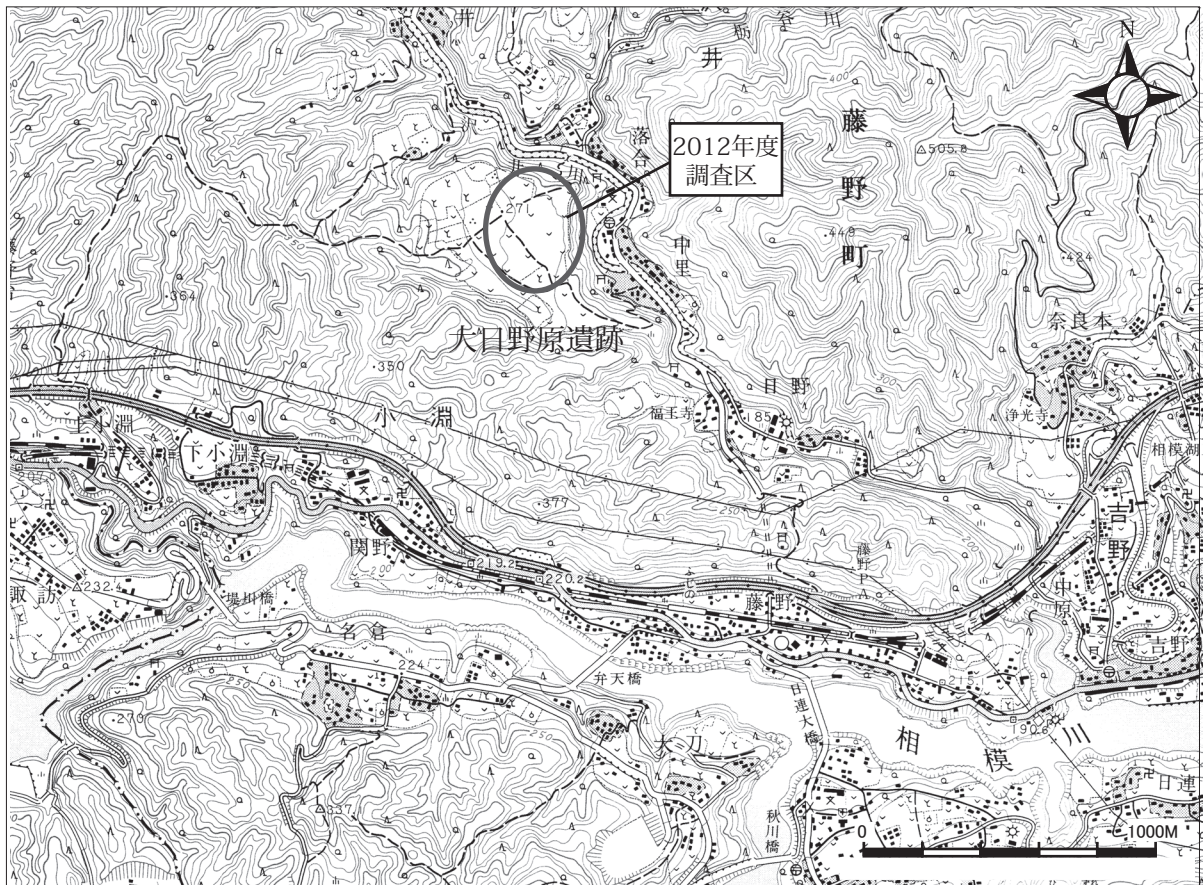


図1 大日野原遺跡の位置

02・03の全体のプランを確定するため掘り下げた上で全体を調査し7基以上の重複する住居群を確認するなど集落の様相を明らかにする上で一定の成果をおさめた。

2012年度より科学研究費補助金C「炭素14年代測定による縄文集落の研究」(2010年～2012年度 課題番号22520774)における調査として地点を変えて継続することとし、第4次調査区として新たな地点を定めて地権者の了承を得た。相模原市教育委員会との共同研究を継続しつつ中央大学における考古学教育の一環とするために中央大学文学部が調査主体となり、調査担当者は上記科学研究費の研究代表である中央大学文学部日本史学専攻の小林謙一准教授が引き続き調査担当とすることとして、中央大学文学部長河西良治から神奈川県教育委員会教育長に埋蔵文化財保護法92条第1項に基づく発掘調査の届けを6月11日におこない、7月19日に受理(文遺第50032号)を受けた。

調査は7月30日より8月8日までおこなった。各調査区の配置は図3調査区略図および図5の2012年度遺構平面図の通りである。調査区に対し「キ」の字形にトレンチを設定し遺構確認をおこないつつ包含層を掘り下げた。中央に東西方向に長さ約24m、幅2mでEトレンチを設定し、直交する南北方向のトレンチとして、西側に長さ約14m、幅1mでFトレンチ、東側に長さ15m、幅1mでGトレンチを設定した。なお、各トレンチの直交部分は柱状に残した。なお、今年度の調査面積は74㎡となった。調査終了後の8月17日に、中央大学文学部長河西良治から相模原警察署長に埋蔵物発見届けを提出(受理番号2737号)し、神奈川県教育委員会教育長に8月8日付で出土文化財保管証を提出した。

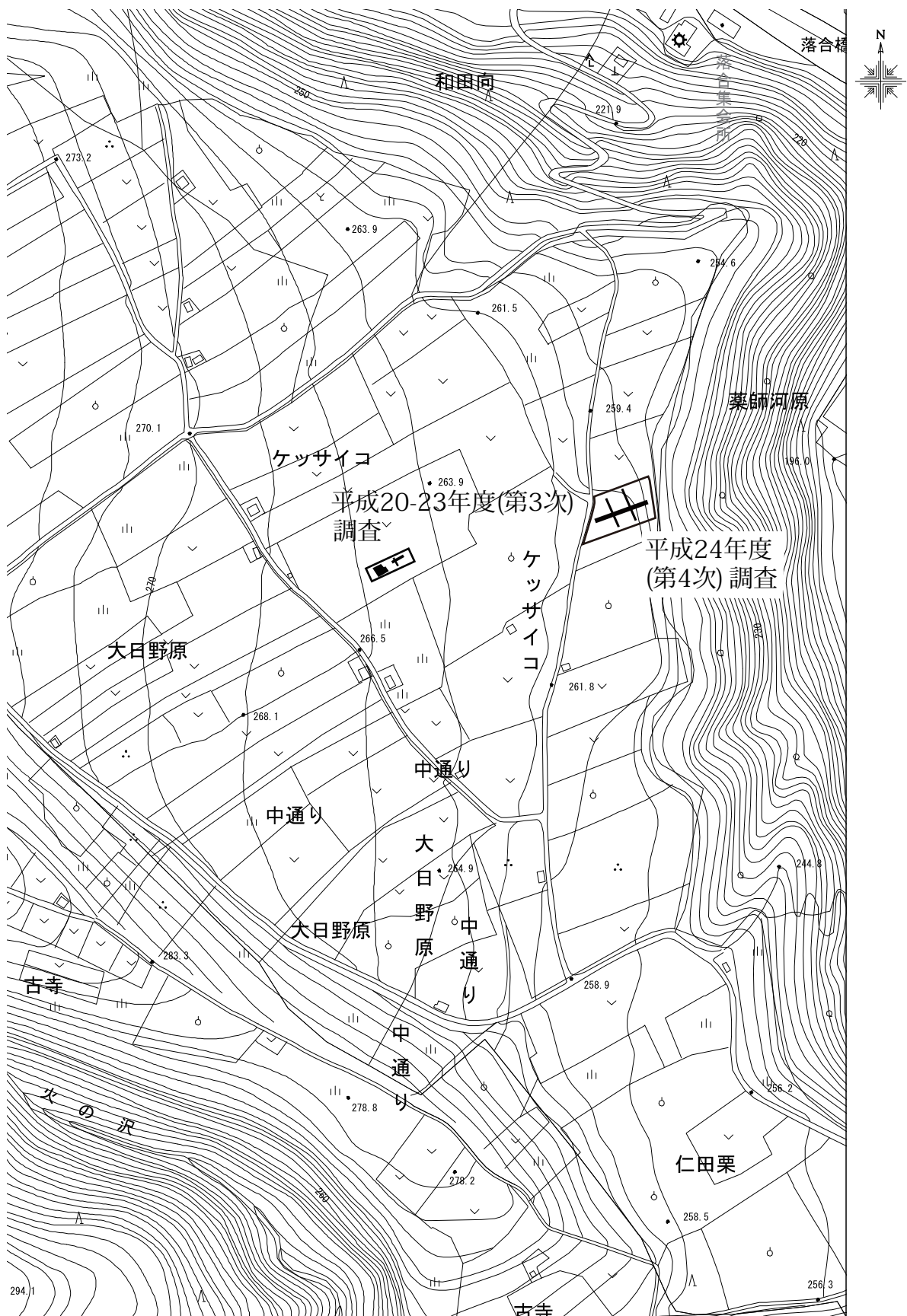


図2 大日野原遺跡調査区周辺図

(3) 調査参加者・協力者

調査参加者（順不同、敬称略）

小林謙一（中央大学）、正洋樹（相模原市立博物館）、永田悠記、矢嶋良多、小澤政彦（中央大学大学院）、宮田公佳（国立歴史民俗博物館）、武田剛郎（大網白里町）、村本周三（斜里町教育委員会）、今泉沙希、太田立、久慈歩、後藤友美、田辺敬志、新村春佳、小川瑞穂、山本滯、佐々木玲央、坂根朋也、佐藤孝郁、田中悠介、安齋有紀、高橋久仁子、金城奈緒子、藤井健樹（中央大学）、山田英就、松山功裕、白石桃子、鈴木真理子、尾林亮一、妹尾崇、太田芳樹、岡本一希、吉田廉、大作祐太郎、田村麻梨菜、川瀬しおり、行田美咲、網谷愛美、橋本歩実、降矢祐輔（中央大学考古学研究会）、橋本望（首都大学東京）、鈴木佑太郎（東海大学）、石川和明、渡辺敦子（個人）、石井美花、米谷将（立正大学）、馬場羽瑠桂、佐藤海（國學院大學）小林尚子（セツルメント研究会）、市川憲子、鹿山茂樹、神垣真理子、樽林亨、千葉宗嗣、西本志保子、村上金四郎、守屋之栄、荒居基喬、和家洋壽、土屋宗平、鈴木文昭、萩原昭夫（以上相模原市立博物館ボランティア）

調査協力者（順不同、敬称略）

門倉睦男（藤野中央公民館長）、（藤野中央公民館）、森川哲郎（沢井公民館長）、谷古宇和也（相模原市立総合学習センター）、山中菜生（中央大学）、河本雅人、中川真人（相模原市教育委員会教育局生涯学習部文化財保護課）、中村耕作（國學院大學）、黒尾和久（ハンセン病資料館）、土井義夫（八王子市郷土館）、武川夏樹（栃木県教育委員会）、相模原市教育委員会、藤野支所、鈴木實（地権者）

(4) 調査日誌妙録

- 7月30日 機材搬入、試掘トレンチを設定、E・Fトレンチの表土除去、Ⅱ層まで掘り下げ。
- 7月31日 Eトレンチ西より古代の竈址を検出し、SI-10を設定
調査区全体をⅢ層上面まで掘り下げ
- 8月2日 Eトレンチ西においてSI-10のプランを検出
- 8月3日 子ども体験発掘
SX-22の底面よりローム層を確認
SI-10の西側に古代住居の粘土を検出(SI-11と設定したが、後にSI-10北カマドとした)
- 8月4日 Eトレンチ西において、加曽利E式後半期の集石を検出
- 8月5日 Eトレンチ中央のSX-26から後期前半と思われる埋設土器を検出、SU-1と設定(後にSI-12の埋嚢として捉える)
ローム層確認のためEトレンチ東にサブトレンチを設定
- 8月6日 平板による遺構分布図の作成
- 8月7日 SX-25の底面に縄文の包含層と予想される黒色土を確認
図面作成、写真撮影、埋戻し
- 8月8日 埋戻し、機材搬出

（５）2012 年度の調査成果

検出遺構

縄紋時代としては、縄紋時代後期堀之内式土器を埋設した埋甕 SU-1 が 1 基検出された。この埋甕を東側として、E トレンチ西側および F トレンチ北側・南側にかけて重複する竪穴住居のプランが認められ、SI-12 住居とした。また北側に別の竪穴住居らしきプランも認められた。埋甕は SI-12 住居に伴う可能性が高いと考えているが、次年度以降の調査に待ちたい。

他に上面からのプラン確認で G トレンチと E トレンチ直行部の G トレンチ北側から E トレンチ東側の斜面落ち込み際に竪穴住居らしきプランが部分的に認められ、竪穴住居跡の可能性はあるが、部分的な確認のため次年度以降に確認する必要がある。そのプランに対応する可能性のある落ち込みとして、E トレンチ東端部の斜面落ち際に当たる層位確認用サブトレンチで、縄紋時代包含層に相当する層位において断層状の落ち込みが検出されているが、全体の広がりや規模が不明であり、現時点では人為的な掘込みか自然の断層か判断できず、次年度以降の調査で確認する必要がある。

また確認のみであるため詳細が不明であるが、E トレンチ西において縄紋時代に属する集石の可能性のある礫集中 SS-1 が 1 基検出されている。

平安時代に属すると考えられる遺構としては、カマドを有する竪穴住居跡である SI-10 住居が確認された。上面確認であり全体は不明であるが、方形のプランで、北側及び東にカマドがあり、東カマドから北カマドに作り直した可能性がある。上面確認面出土であるが、土師器・須恵器片が出土している。

また、上面からのプラン確認のみであるが G トレンチ北側の斜面落ち込み際に、黒色土を覆土に持ち方形を為す竪穴住居のコーナーらしきプランが切り合う形で部分的に認められ、次年度以降さらに確認が必要である。

他に平安時代に属すると思われる円形土坑が E トレンチ中央部および G トレンチ、F トレンチ南に、5 基検出された（SX-20・22・23・30・31）。ただし SX-23 については深いため掘立柱の柱穴の可能性もある。それぞれ径 1 から 2 m、深さ 30cm ほどの平面円形、断面タライ形の浅い土坑である。

このほか、時期不明のピット、近代以降の耕作に伴う方形の掘込み（いわゆるイモ穴 SX-21・25・27・29）が数基検出されている。

出土遺物

出土遺物に関しては、縄紋時代中期の勝坂式、後期堀之内式および平安時代と思われる古代の土師器・須恵器を中心に出土しているが、現在整理中であり、詳細は正式な報告をもっておこないたい。縄紋時代の土器としては、中期勝坂 1 式、勝坂 2 式、阿玉台 I b 式、II 式、後期称名寺式、堀之内 I 式、堀之内 II 式、加曽利 B1 式、2 式、安行 1 式と考えられる土器片が認められているが、現在整理中であり詳細不明である。

石器としては打製石斧、石鏃などが検出されている。

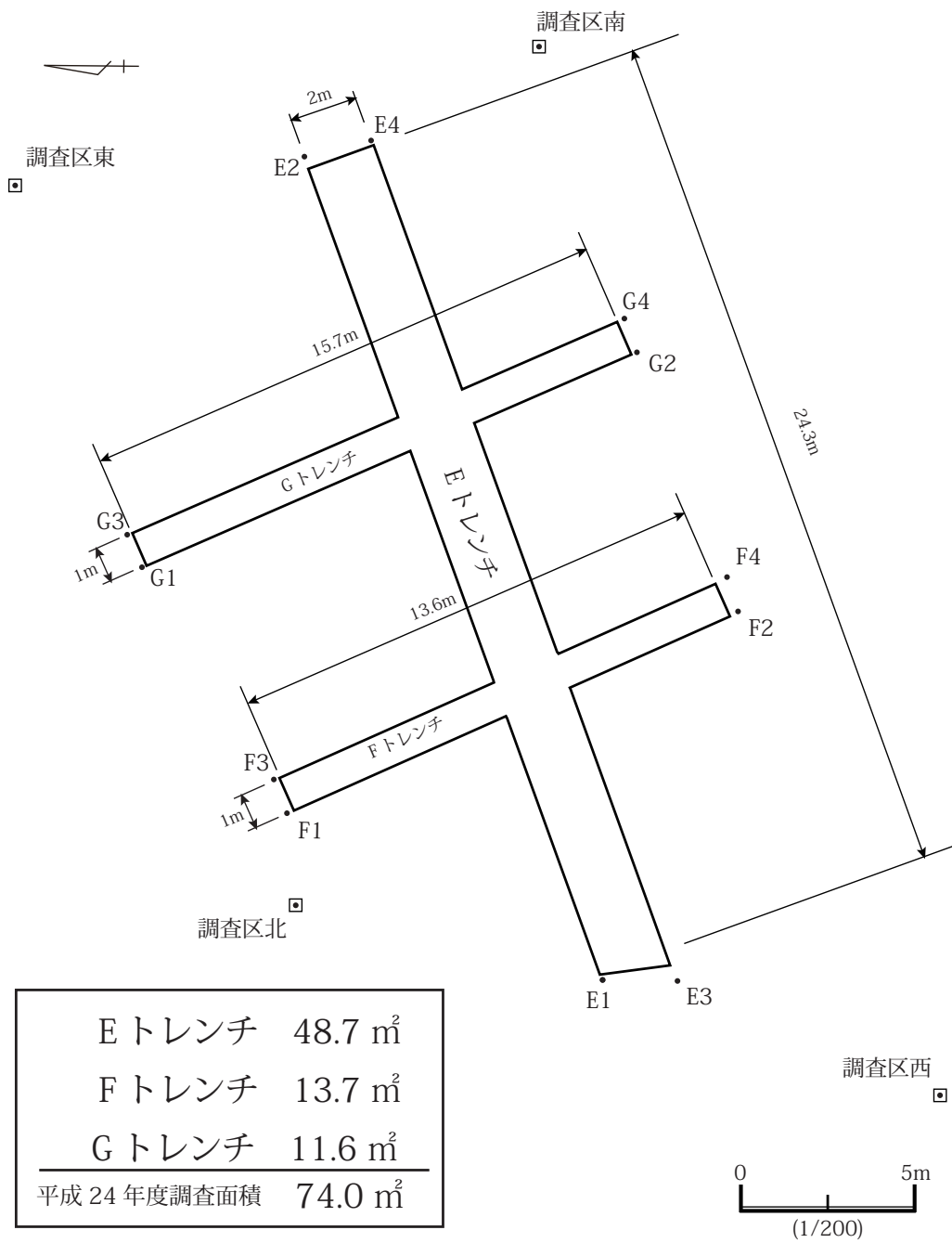


図 3 調査区概要

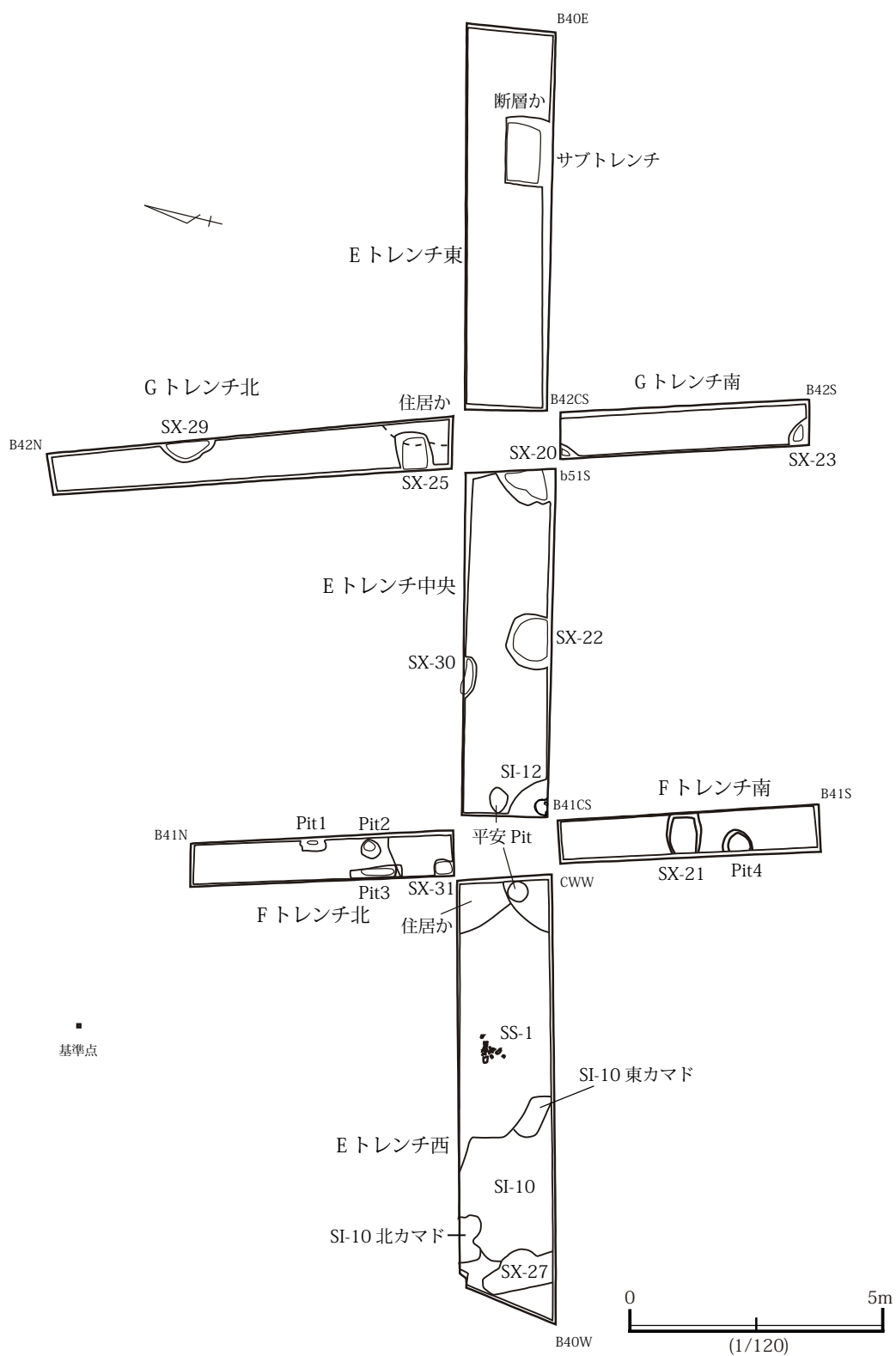


図4 2012年度調査区全体図

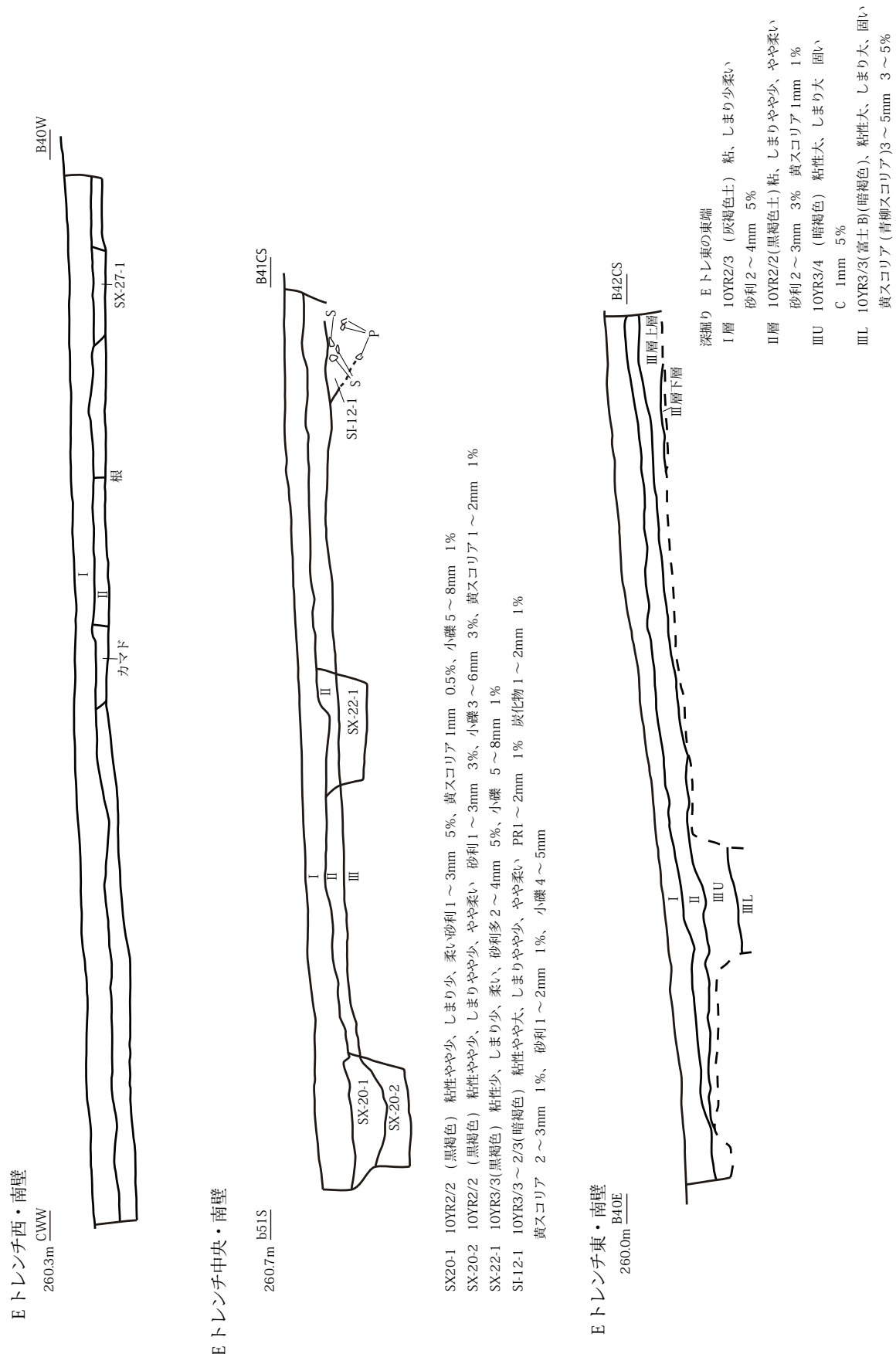
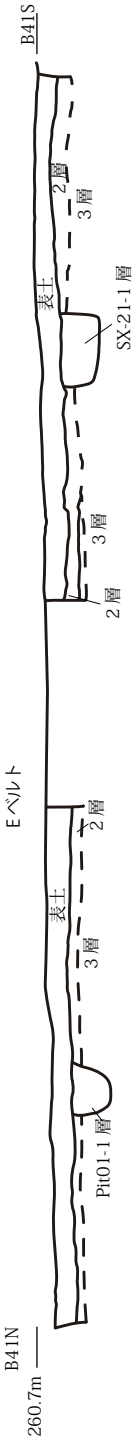


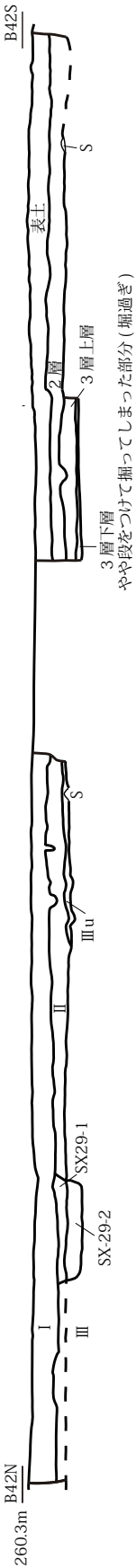
図5 2012年度調査区土層断面図(1) (1/50)

F トレンチ東壁



ビット 1-1 10YR3/3(黒褐色) 粘性少、しまり少、柔い砂利 2～3mm 3%、小礫 5～8mm 1%
SX-21 10YR3/3 (黒褐色) 粘極少、しまり極少、柔い、砂利 2～4mm 5%、小礫 5～8mm 1%、黄褐色スコリア粒 3～5mm 1%

G トレンチ東壁



SX29-1 10YR2/2 (黒褐色) 粘性やや少、しまり少、柔い砂利 1～3mm 5%、黄スコリア 1mm 0.5%、小礫 5～8mm 1%
SX29-2 10YR2/2 (黒褐色) 粘性やや少、しまりやや少、やや柔い、砂利 1～3mm 3%、小礫 3～6mm 3%、黄スコリア 1～2mm 1%

図6 2012 年度調査区土層断面図 (2) (1/80)

引用・参考文献

- 小林謙一他 2004「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」『シンポジウム縄文集落研究の新地平 3—勝坂から曽利へ—発表要旨』縄文集落研究グループセッションメント研究会
- 小林謙一 2011『発掘で探る縄文の暮らし 中央大学の考古学』中央大学出版部
- 縄文時代研究プロジェクトチーム 2002「神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅵ—中期後葉期 加曽利 E 式土器文化期の様相その 2 土器編年案—」『研究紀要 7 かながわの考古学』（財）かながわ考古学財団
- 永田悠記・納美保子・小林謙一 2010「2008 年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』33 号 中央史学会
- 矢嶋良多・小林謙一 2011「2009 年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』34 号 中央史学会
- 矢嶋良多・小林謙一 2012「2010 年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』35 号 中央史学会
- 藤野町教育委員会 1978『藤野町の埋蔵文化財』
- 藤野町 1994『藤野町史 資料編上』
- 藤野町 1995『藤野町史 通史編』



(上) 2012 年度調査区

(下) 調査風景





(上) 埋甕 (SU-1)
(下) ピット確認状況





(上) E トレンチ西 竪穴住居カマド確認状況 (SI-10)

(下) 円形土坑 (SX-22)





(上) 2012 年度出土遺物 縄紋土器

(下) 2012 年度出土遺物 縄紋石器・土師器・須恵器



大日野原遺跡

－ 2012 年度発掘調査概報 －

2013 年 3 月 31 日

編集・発行 中央大学文学部考古学研究室

〒 192-0393 東京都八王子市東中野 742-1
TEL042-674-2814
